

中学校英語教育における基本的指導事項の検討(1):

依頼機能を持つ Will you～?

高 塚 成 信

ABSTRACT: In this paper an attempt is made to investigate the way the linguistic form 'Will you～?' is introduced as a request form in junior high school English textbooks and to point out some problems involved. This investigation then suggests that the forms 'Would you～?' or 'Could you～?' instead of 'Will you～?' should be introduced as a request form at the junior high school level.

1. は じ め に

中学校英語教育において、伝統的に一つの重要な指導・学習項目とされてきた依頼機能を持つ 'Will you～?' について、井出(他)(1986:201)は、アメリカ人大学生を対象とした最近の大規模な敬語行動調査から、「ペンを借りる」ことを頼むという状況において、次のようなことを明らかにしている。

「…日本人の目から見るとやや奇異に感ぜられる部分がある。その典型的な例は、"Will you～" というパターンがないことである。実際、もとのデータでチェックしてみると、7444個の回答のうち "Will you～" は "Will you lend me your pen" など、たった4例しかないのである。依頼表現として "Will you～" を使うものと教えられてきたのが日本人の英語の常識だが、この調査はそれをくつがえすような結果になっている。」

しかしながら、その調査では、日英両語における依頼表現間の丁寧度に関する数量的比較分析に焦点が置かれ、'Will you～?' が何故依頼表現としてあまり用いられないのかに対する答えは、与えられていない。

そこで、本論は、'Will you～?' が依頼機能を持って用いられる場面、人間関係、並びに話者の心的態度について質的に考察し、現行の英語教科書をはじめとする中学校英語教育における 'Will you～?' の扱い方が適切かどうかを検討することを目的とする。¹⁾

2: Will you～?の依頼機能について

Searle(1979:36-37)は、間接的に依頼機能を果たす言語形式(indirect directives)として、焦点を当てる聴き手及び話し手の要因によって、次の5グループを設定している。

- ① H(earer)'s ability (Can you/Could you)
- ② S(peaker)'s wish or want (I would like you to/I want you to)
- ③ H's doing A(ct) (Will you/Won't you/Would you)
- ④ H's desire or willingness (Do you want to/Would you mind)
- ⑤ reasons for doing A (You ought to/You should/You'd better)

このうち、③の聴き手(H)がこれからある動作(A)をするのかどうか尋ねることによって、

間接的に相手にものを頼む言語形式の一つが‘Will you～?’であるが、これは、本来的には「あなたは～するつもりですか/～しますか」ということを尋ねることによって聴き手にある動作をすることを依頼するという行為を間接的に行おうとするものであるから、丁寧な表現ではないのではないかということは想像に難くない。

この点に関する Leech (1983:119-123) の指摘は興味深い。すなわち、例えば、‘Will you take me home?’ という表現は、聴き手の意志・意向を問うことによって依頼機能を持たせるものであるが、‘No, I won’t.’ と答えると、聴き手は、話し手の意向より自分の意向を重んじることになり、impolite になる、つまり、‘Will you～?’ という言語形式は、聴き手に断わり難くするという点で、命令文 ‘Take me home.’ や ‘I want you to take me home.’ に近い impolite な形式であるというものである。また、聴き手の能力を問うことによって間接的に依頼機能を為そうとする ‘Can you～?’ は、断わる場合、聴き手は、‘Will you～?’ の場合のように、やろうと思えばできるのに、意志がなくて断わるのとは異なり、やりたくても能力がなくてできないという理由で断わることになり咎められることから免れる、すなわち、‘Can you～?’ という形式によって、‘Will you～?’ のもつ impoliteness をさけることができる、と述べられている。

また、Bull・井出 (1979:164) は、はっきりと次のように述べている。

「普通、人をして何かさせるときは、“Could you…? / Would you…? / Would you mind…-ing…?” を使う。“Please” だけを命令形の前に付けたり、“Will you…?” という言い方は、命令していることと同じなので、相手に命令を下せるような親しい間柄、たとえば先生と生徒のような間柄でつかわれる。」

従来、一般に、言語項目 A, B, C 間の丁寧度の記述は、 $A > B > C$ というような形をとることが多かった。すなわち、聴き手に物理的・精神的負担 (cost) がかかる行為をしてくれるよう依頼する場合、 $C = VP_i$ (命令文), $B = \text{Will you } VP_i ?$, $A = \text{Would you } VP_i ?$ とすると、相対的に丁寧度において、 $A > B > C$ という不等式が成り立つとされてきたが、それでは、B を、外国語としての英語学習者がどのような場面で十分な丁寧さを含意して使用できるのか、また、そのような場面は頻繁に現われるのか、という視点での考察が不足していたと言える。

3. Will you～? の中学校英語教科書における扱いについて

そこで、英語母国話話者 (以下 NS と略す) が ‘Will you～?’ の使用に際してどのような意識を持っているのかを調べるために、6 種類の中学校英語教科書における依頼機能を持つ ‘Will you～?’ の導入ページを見せ、依頼表現としての丁寧度・適切性を判断し

表 1: 各教科書における ‘Will you～?’ の扱い

	予定を聞く表現として	依頼の表現として
NC 2	×	●Lesson 7 Section 4
NE 2	●Lesson 8 Section 3	○Lesson 8 Section 3
NH 2	×	○Lesson 8 Section 2
OW 2	●Lesson 5 Section 3	
SE 2	○Lesson 4 Section 3	●Lesson 4 Section 4
TE 2	●Lesson 6 Section B	○Lesson 9 Section C

[注] NC: *New Crown English Series* NE: *New Everyday English*
NH: *New Horison English Course* OW: *One World English Course*
SE: *Sunshine English Course* TE: *Total English New Edition*

●: Target sentence として扱われている

○: Target sentence としてではないが、扱われている

×: 扱われていない

てもらった。その結果は、次節で報告することにして、その前に、各教科書の 'Will you~?' の導入状況をまとめると、表 1 のようになる。²⁾

この表から明らかなように、6 種類すべての教科書において、依頼の 'Will you~?' が扱われ、半数が target sentence に指定している。反面、二人称主語以外の疑問文は扱っているものの、予定を聞く 'Will you~?' を扱っていないものが 1/3 に達しており、いかに依頼の 'Will you~?' が重視されているかが窺える。

4. 英語母国語話者 (NS) への調査

調査の方法としては、NS に 6 種類の中学校英語教科書における依頼の 'Will you~?' 導入ページを見せ、依頼表現としての丁寧度・適切性を判断させる方法をとった。被験者は 4 人の NS で、その内訳は、アメリカ人 2 人 (男 31 才, 女 28 才) およびオーストラリア人 2 人 (女 21 才, 女 22 才) であった。

その結果、4 人共通の反応として現われたものは、次の 3 点に大きく要約できる。

- ① 依頼の 'Will you~?' として導入しているものの、予定を聞くものと解釈した方がよいものがあるが、依頼ならば 'Would you/Could you~?' を使った方が良い。
- ② 本文では、'Will you~?' が依頼文として使用できる適切な場面や話者・聴者間の役割関係が設定されているものの、target sentence としてページ下部に示されたものには、場面や話者・聴者間の役割関係が規定されておらず、結果的には、'Will you~?' の使える場面が過剰汎化されているものがある。
- ③ 本文・target sentence において、依頼の 'Will you~?' の使用が、場面によって適切に限定されていないものがあるが、依頼ならば、'Would you/Could you~?' を使用した方が良い。

まず、①の問題点は、OW・TE について指摘された。それぞれの、本文は、次の通りである。

OW Book 2, p. 29

Makoto: Can we go inside the White House?
Mr. Green: Yes, we can. I will show you the
Rose Garden.
Makoto: Will you show us the cherry trees, too?
Mr. Green: Of course. Look behind you. All those
trees are the cherry trees.

TE Book 2, p. 51

Sayonara, dear friends, tsaichen. Will you
write me a letter? I think of you often.

OWの‘Will you show us the cherry trees, too?’は、直前のMr.Greenの発話である‘I will show you the Rose Garden.’があることによってなおさら、今後の予定・行動を問うものという解釈を受ける可能性が大きいことが指摘され、依頼ならば、‘Would you/Could you?’が望ましいとされた。また、TEでも同様に、‘Will you write me a letter?’には、同様の問題点があることが指摘され、friend-friendのequal/familiar relationshipであるにも関わらず、依頼としてなら、‘Would you/Could you?’がより適切であることが明らかとなった。

次に、②の問題は、NEとSEで見られた。それぞれの、本文および欄外は、以下に示す通りである。

NH Book 2, p.58

本文 Emi : Do you have any books on Yukichi Fukuzawa ?
Librarian : Will you give me that name again ?

欄外 ◇Will you (please) take my picture ?

SE Book 2, p.27

本文 (税関で)

Officer : Will you open your bags ?

Takeo : Pardon ?

欄外 : Target sentence

Will you help me ?

NHでは、本文の設定はlibrarian-library userという役割関係の中で、図書館利用者が、‘Do you have any books on Yukichi Fukuzawa?’と尋ねたのに対し、名前を聞き取れなかった図書館員が、‘Will you give me that name again?’と聞き返すものとなっている。ここでは、利用者のために本を捜すべく、必要な情報を聞き返す行為は、図書館員の職務上の‘routine’と解釈し得るので、‘Will you?’でも許容されると判断された。しかし、欄外の‘Will you (please) take my picture?’が適切にL₂学習者によって使用され得る場面を想定することは難しく、一般性のある依頼文としては、‘Would you/Could you?’にすべきであると指摘された。

同様に、SEでも、本文は、customs officer-travelerという役割関係の中で、税関職員が、旅行者に対して、‘Will you open your bags?’と述べる場面設定になっている。カバンを開けさせることは、税関職員の職務上の権限であり、それ故、指示としての‘Will you?’は、‘expected routine’として許容されるものであると判断された。³⁾しかし、targetとして掲げられた‘Will you help me?’では、そのような場面的役割関係的制約がはずされ、‘Will you?’の使用範囲が過剰汎化されていて、L₂学習者に誤った理解を生じさせる危険性があり、‘Would you/Could you?’に変えるべきであると指摘された。

すなわち、‘Will you?’は、何らかの職務上等の‘routine’として発話されない限り、forceful/authoritativeに響くimpoliteな依頼の形式であるということが明らかになった。例えば、SEのtargetに示された‘Will you help me?’であれば、忙しく家事をしている母親に目もくれず、テレビにかじりついている子どもに対して母親が用いて、‘annoy-

ance' および 'irritation' を示唆することができるという具合に、かなり使える場面に制約があると言える。

③の問題は、NCとNEに見られた。それぞれの内容は、以下に示す通りである。

NC Book 2, p. 45

本文	Jiro : Will you come over here, Mrs. Hill? Mrs. Hill : What ? I can't hear you.
欄外	: Target sentence Will you come over here?

NE Book 2, p. 51

本文	Will you please stop there, Dad?
----	----------------------------------

NCでは、本文で Jiro が彼の妹 Mie のオーストラリアでの滞在先の May の母親である Mrs. Hill に対して、「こちらに来てください。」という意味で 'Will you come over here, (Mrs. Hill) ?' と言っており、target としても同じ文例が掲げられているが、どちらも 'Would you/Could you～?' にすべきであるという指摘を受けた。また、NEでは、娘が自分の父親に対して 'Will you please stop there, Dad ?' と言っているが、このような話者・聴者間の関係が familiar な場合においてでさえも、'Would you/Could you～?' がより望ましいと指摘された。

本調査は、その被験者数が極端に少なく、NSの intuition に頼ることが大きいものであり、この結果をもって直ちに何らかの結論を出すことは、控えなければならないが、教科書の 'Will you～?' の扱い—それは中学校英語教育における 'Will you～?' の扱いに直接的に繋がっている—には問題がありそうだとすることが判明した。

5. 関連した問題点

(1) 教科書における 'Will you～?' の訳・説明

以上の様な問題をさらに大きくしていると思われるものに、教科書において 'Will you～?' に与えられている日本語訳・説明がある。すでに周知のように、過去においては、'had better' が、「～した方が良い」という日本語訳で導入されたために、社会言語学的・語用論的に不適切な使用を招いたことがあったことから解るように、訳や説明は重要な役割を果たしている。表2は、各教科書別の 'Will you～?' に与えられた訳・説明およびそ

表2：各教科書における 'Will you～?' の訳・説明

	訳・説明	場所
NC 2	Will you come over here ? こちらに来ていただけますか。 Will you～? の文—「～してくれますか、～しませんか」と相手にものを頼んだり誘ったりする場合には Will you～? を用います。	学習の手引き
	Will you～? (～していただけますか)	発展練習

	訳・説明	場所
NE 2	Will 3. Will you~? ～するつもりですか [～してくれますか]	語句
NH 2	Will you give me that name again? もういちどその名前を言ってくださいませんか。	Word List
OW 2	Will you (please) show us the cherry trees? 桜の木をみせてくれませんか。	Word List
SE 2	Will you~? ～してくれませんか。	Words and Phrases
TE 2	Will you~? ～していただけますか	脚注 2年で習うことば

れが与えられている場所の一覧である。

概ね日本語では、「～していただけますか」「～していただきませんか」「～して下さいますか」は、かなり丁寧な依頼の言語形式であって、目上の見知らぬ人に対しても充分に使用可能なものである。しかし、表から明らかなように、大抵の中学校英語教科書では、「Will you~?」の訳として、これら丁寧な日本語の依頼表現を当てている。このことが、教師・学習者に「Will you~?」について誤った認識を与えているのではないと思われる。

Hill et al. (1986) の日米依頼表現の丁寧度比較調査によって明らかにされたように、「Will you~?」が入ると考えられる丁寧度3あたりの英語依頼表現に丁寧度で対応する日本語の表現は、「～して下さい」であり、「～していただきませんか」「～していただけますか」という日本語表現は、英語で最も丁寧だとされる「May I~?/Would you mind if I V-ed?」/「Would it be all right if I V-ed?」/「I was wondering if I could…」などよりも丁寧な表現だと判断される(図1参照)。従って、「Will you~?」に英語教科書が与えているような丁寧な日本語を当てるのは不適切であり、学習者の語用論的誤りを招きかねない。

実際、青木(1987c)は、NSと日本人英語学習者間に「Will you~?」の丁寧度判断においてgapが存在することを明らかにしている(図2参照)。すなわち、NSの判断した「Will you~?」の丁寧度は、-0.6であるのに対して、日本人英語学習者の判断した丁寧度は、0.1であった。

このことは、阿部・田中(1987)によっても確認されている。彼らは、日本人の高校生・大学生とNSに対して行った「functional competence」の調査において、見知らぬ年上の相手(=病院の待合室で窓際に座っている知らない年とったおばさん)に、窓を開けてくれるよう頼むのに、「Will you open the window?」という表現の適切性を5段階評価で判定させた結果、NSは、平均1.83(適切とは言えない-全く不適切である)と判断しているのに対して、日本人英語学習者は、3.68~3.08(ほぼ適切-どちらとも言えない)と判断していることが明らかにされている。さらに、自分と同年齢でも親しい関係でない人(=あまり話しをする間柄ではない同級生)に頼むのにも、「Will you open the window?」という表現に対して、NSは、平均2.67(どちらとも言えない-適切とは言えない)と判断しているのに対して、日本人学習者は、3.78~4.16(ほぼ適切)と判断していることが示されている。

図1: Ranking of politeness of request forms
Hill et al. (1986: 355)

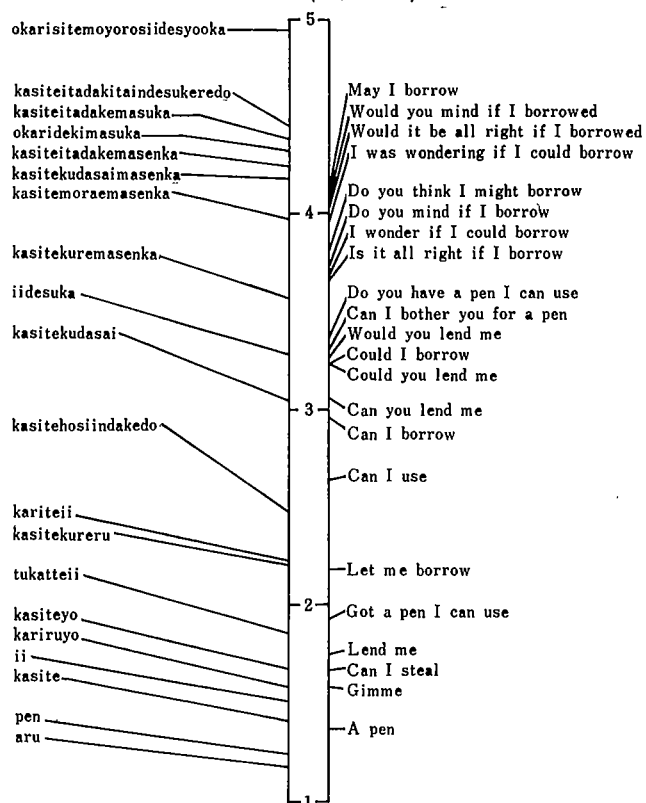


図2: 依頼表現の丁寧度判断の比較
青木 (1987c 印刷中)

Native speakers	丁寧度	Learners of English
I wonder/Would it be possible	1	
Would you mind	0.9	Could you/Would you mind/Would you
	0.8	
May I	0.7	Could I
	0.6	Do you mind
I'd like to	0.5	
Do you have/Could you	0.4	
Would you	0.3	
Could I	0.2	I'd like to
Do you mind/Have you got	0.1	Will you/May I
	0	Can you
	-0.1	Please VP/Can I
Can you	-0.2	
	-0.3	
Can I	-0.4	Do you have
Please VP	-0.5	
NP please/I need NP/Will you	-0.6	
want	-0.7	Please NP/I want to
	-0.8	
Gotta pen	-0.9	VP
VP/NP	-1	You have to/You'd better

(2) 教科書における‘Can you～?’の扱い

‘Will you～?’の日本語訳・説明に加えて、もう一つの問題点は、‘Will you～?’より丁寧に依頼を表わせるとされる‘Can you～?’(Leech 1983:119-120)が、中学校英語教科書では、十分に扱われていないことである。表3は、各教科書における依頼用法の‘Can you～?’の扱い状況をまとめたものである。⁴⁾

表3：各教科書における‘Can you～?’の扱い

	依頼の表現として	備 考
NC	×	
NE	○	1年13課 §3 Can you call her to the phone? 1年15課 §1 Can you help me? を本文で出しているが、依頼機能への言及はない。
NH	○	2年 Word List Can you help me, Maria? 手伝ってくれないか、マリア。
OW	×	
SE	○	2年 「こんなときどう言うか」 ものを頼むときとそれに応じるとき Please～/Will you～?/Can you～?を 挙げている
TE	○	1年10課 §D Can you talk to us about Canada?を 出しているが、依頼機能への言及はない。

Indirect speech actとして、能力を問うことによって、依頼を表わす言語形式‘Can you～?’は、意志・予定を問うことによって依頼を表わそうとする‘Will you～?’より間接性が低く、日本語の語用論との共通性が高いことが、表3から明らかのように、‘Can you～?’の依頼機能がとりたてて扱われていないことの理由の一つであると思われる。しかし、既習の‘Can you～?’の依頼機能を取り上げないで、‘Will you～?’を新たに導入することには疑問がある。また、表3のNHの欄から解るように、‘Will you～?’には、「～していただけますか」という非常に丁寧な日本語を与えながら、‘Can you～?’には、「～してくれないか」というinformalでimpoliteな日本語を与えるという不適切な例も見られた。

5. まとめと英語教育への示唆

以上の考察により、現在中学2年生で丁寧に依頼表現として導入されている‘Will you～?’の扱いが適切でないことが解った。命令文、please+命令文を既に1年生で導入し、次に、聴き手に負担のかかる内容を丁寧に依頼するために導入する新しい項目としては、その適切な使用が、場面的・人間関係的要因によってかなり限定され、丁寧さを十分に表わすことが困難な‘Will you～?’は不適切であると言える。参考までに述べると、functionごとにより広範な言語項目を列挙したBlundell et al. (1982:142 ff.)の場合、

Requesting の言語項目としては、‘Will you～?’ を含めていない。同様に、function ごとに、習得されるべき基本的言語項目を示した van Ek (1976:48) の場合も、Requesting others to do something の言語形式としては、‘Will you～?’ を含めていない。

それでは、どのように改善すれば良いだろうか。一つの方策としては、‘Will you～?’ は、相手の意志・予定を聞くという機能だけに限定し、そのかわりに、依頼表現として早い段階で ‘Would you/Could you～?’ を導入することであると考えられる。

現行中学校英語教科書における would/could の出現用例を見ると、表 4・表 5 の通りである。

表 4：各教科書における would の出現例

	would like to	時制の一致	習 慣	どうしても～ない
NC	○(3)	×	×	×
NE	×	○(3)	○(3)	×(3)
NH	○(2)	×	×	○(3)
OW	○(2)	×	×	○
SE	○(3)	×	×	×
TE	○(3)	○(3)	×	×

() は学年

表 5：各教科書における could の出現例

	NC	NE	NH	OW	SE	TE
できた	○	○	○	○	○	○

これらの表から明らかなように、would/could は、中学校英語教科書で扱われているものの、それらに依頼機能を持たせた例は全く見られない。これは、文部省学習指導要領が、仮定法を中学校で扱うべき（扱える）項目としていないこと、ならびに、‘Would you/Could you～?’ を仮定法と解釈することに原因がある。

しかし、指導要領が各学年で扱い得る文法項目を指定するのが適切かどうかの議論にはここでは立ち入ることはしないが、現行の指導要領の制約内でも、仮定法と解釈することも可能な would like to～は、中学校において扱われているのであるから、‘Would you/Could you～?’ の依頼用法も、高等学校で導入されるべき主たる仮定法の用法とは異なり、would like to～同様、慣用表現として、中学校において扱い得るものであると思われる。

【注】

- 1) 本論の目的は、特定の教科書の内容を批判することではなく、広く行き渡っている ‘Will you～?’ に対する misconception を問題にすることにある。
- 2) 本論では、教科書での出現頻度よりも、初出時の扱いが学習者に与える影響が大きいのと考え、頻度に言及していないが、ちなみに、6 種類の教科書本文に ‘Will you～?’ が 16 例出現し、そのうち依頼機能をもたせたものは、12 例あり、頻度からも重要視されていることが解る。
- 3) 日本語にすれば、概ね「はい、カバン開けて」とでも言うような事務的な表現に対応すると考えられる。
- 4) 能力を問う ‘Can you～?’ は、どの教科書でも 1 年生の target になっている。

【謝辞】

本論の作成にあたり、あらゆる協力を惜しまれなかった同僚のマイケル・クリフトホーン先生に、心から感謝の意を表します。

【参考文献】

- 阿部 一・田中茂範 (1987) 「日本人英語学習者にみる “Functional Competence” の研究」
第13回全国英語教育学会岡山研究大会 口頭発表資料
- 青木信之 (1987a) 「丁寧度に関する一考察(依頼表現を中心に) - レジスターの視点による教科書分析 -」『教育学研究紀要』32, 165-169.
- 青木信之 (1987b 印刷中) 「依頼表現に関する丁寧度判断 - 受容的判断を中心に -」
- 青木信之 (1987c 印刷中) 「依頼表現の丁寧度判断について - 発表的技能を中心に -」
- Blundell, J., J. Higgins, and N. Middlemiss (1982) *Function in English*. (Oxford: O. U. P.)
- Bull, R. ・井出祥子 (1979) 『英語のていねい表現』(東京: オックスフォード大学出版局)
- van Ek, J. A. (1976) *The Threshold Level for Modern Language Learning in Schools*.
(London: Longman)
- Hill, B. et al. (1986) 'Universals of linguistic politeness' *Journal of Pragmatics* 10, 347-371.
- Hiraoka, T. (1986) 'A communicative approach to the learner's language' Unpublished
M. A. thesis, Okayama University.
- 井出祥子(他) (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動 - 大学生の場合 -』南雲堂
- Leech, G. N. (1983) *Principles of Pragmatics*. (London: Longman)
- Oka, H. (1987) 'A sociolinguistic consideration of politeness in English language education'
『英語教育学研究』(大修館) 161-171.
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*.
(New York: Longman)
- Searle, J. R. (1979) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*.
(Cambridge: C. U. P.)

(昭和62年10月30日受理)